

青年期における社交不安障害傾向に関する臨床心理学的研究

－ 両親の養育態度・きょうだいとの関係に焦点を当てて －

小 田 朋 恵

問題・目的

社交不安障害（社会恐怖）とはDSM - IV - TR（2002）によると、1つまたはそれ以上の社交場面に顕著で持続的な恐怖を抱き、しばしば恐怖を抱く状況を回避することと定義されている。そして、社交不安障害は、思春期から青年期に発症しやすいとされている。

親子関係について、依田（1990）は子どもは親子という「タテ」の関係から始まり、きょうだい関係という「ナナメ」の関係を経て、友人と「ヨコ」の関係を作るとしている。

両親の養育態度と対人関係を結びつけた研究は多く、朝倉（2004）により社会恐怖患者の両親の養育態度は、健常者群に比べると、情緒的な温かさが乏しく、感情的な拒絶が強いというような養護の低さが明らかにされている。

きょうだいとの関係と対人関係を結びつけた研究も多くみられ、きょうだいとの関係が信頼し受容する関係であれば、対人関係を円滑に進めるためのスキルである社会的スキルをより多く獲得することができる（岡崎・杉井，2004）が、反対にきょうだいとの関係が分離、対立の関係であれば、友人関係における不信感が高くなること（森下・吉川，2011）や、きょうだい関係が希薄であると一般的な人間関係も希薄になるということが示唆されている（早川・依田，1983）。また、きょうだいとの関係は、友人関係という限られた「ヨコ」の関係のみならず、一般的な人間関係も含めた対人関係に影響を与えていることが考えられる。また、同性同士のきょうだい関係は、分離しておらず、何らかの交流が行われていること（岡崎・杉井，2004）や、女性は同性のきょうだいに対して対立的な関係を持ちながらも親密な関係（養護的・親和的・信頼的關係）を築いている（森下・山口，1992）とされている。

このように、対人関係と両親の養育態度及びきょうだいとの関係に関連があることは明らかにされているが、対人関係をあわせもつ社交不安障害との関連を示した研究は多くない。本研究では、両

親の養育態度にきょうだい関係が加わった時、社交不安障害傾向にどのような影響を及ぼすのかについての検討を行うことを目的とする。

仮説

仮説1 男性よりも女性の方がきょうだいとの関係を良好であると捉えている。

仮説2 男女によって両親の養育態度をどのように認知しているかにより、きょうだいとの関係のあり方にも違いがある。

仮説3 両親の養育態度を肯定的に捉えていても、きょうだいとの関係を良くないものであったと捉えることが社交不安障害の傾向を高くする。

方法

研究協力者 3大学の大学生

調査日時 2013年10月

手続き 講義の前後に、調査の目的や個人情報に関する説明、および回答は任意であることなどを口頭および紙面で行い、質問紙を配布した。1大学には郵送で質問紙を配布し、紙面での説明を行った。回収数は427名分であり、回収率は99.3%であった。分析対象は回収率の低かったひとり親、親以外の養育者、一人っ子等を除いた274名（男性111名、女性163名）であった。

質問紙の構成 ①フェイス項目：性別、年齢、研究協力者を除くきょうだいの人数についての回答を求めた。②Parental Bonding Instrument (PBI) 日本語版：両親の養育態度を捉えるために、小川（1991）が作成した23項目であり、父親・母親それぞれに対しての回答を求めた。③きょうだい関係特徴調査：研究協力者とそのきょうだいとの関係について捉えるために、森下・山口（1992）が作成した30項目からなる尺度である。④Liebowitz Social Anxiety Scale (LSAS) 日本語版：社交不安障害の傾向を捉えるために、朝倉ら（2002）が作成したLSAS日本語版を用いた。LSAS日本語版は社交不安障害患者が症状を呈することの多い行為状況（13項目）、社交状況（11項目）の24項目からなり、それぞれの項目に対して恐怖感/不安感と回避の程度の回答を求める

尺度である。

結果と考察

基礎分析 各尺度の因子分析を行い内的整合性の確認された因子を分析に用いた。PBI日本語版では「父親CA（養護）（ $\alpha=.91$ ）」「父親OP（過保護）（ $\alpha=.73$ ）」「母親CA（ $\alpha=.91$ ）」「母親OP（ $\alpha=.86$ ）」の4因子、きょうだい関係特徴調査では「信頼（ $\alpha=.92$ ）」「親密（ $\alpha=.91$ ）」「対立（ $\alpha=.86$ ）」「親和（ $\alpha=.83$ ）」「養護（ $\alpha=.74$ ）」の5因子、LSAS日本語版では「注目される状況への恐怖感/不安感（ $\alpha=.88$ ）」「コミュニケーション状況への恐怖感/不安感（ $\alpha=.85$ ）」「注目をされる状況の回避（ $\alpha=.89$ ）」「親しくない他者との社交状況の回避（ $\alpha=.84$ ）」の4因子、合計で13因子となった。

両親の養育態度の分類 PBI日本語版の各因子得点に基づき2軸による分類を両親について行い、父親と母親の組み合わせから16群に分類を行った。16群のうち、両親の養育態度がはっきりとしていた「両親ともに情愛と過保護」（男性16名、女性10名）「両親ともに情愛と自律承認」（男性19名、女性18名）「両親ともに冷淡と干渉」（男性31名、女性43名）を分析対象とした。

仮説1の検証 性別による差を見るために全因子についてt検定を行った。その結果、女性よりも男性の方が親の養育態度を養護的であったと捉えており、本研究の協力者は男性の方が親との関係を良好であったと捉えていると考えられる。また、きょうだい関係について、女性の方がきょうだいとの関係は対立しているものの良好であると捉えており、男性はきょうだいとの関係は分離的であると捉えていると考えられる。このことから仮説1は支持された。

仮説2の検証 両親の養育態度別の特徴をみるため男女それぞれに一元配置分散分析および多重比較を行った。その結果、男女ともに「両親ともに冷淡と干渉」群が他の2つの群よりもきょうだいとの関係が良好であったと捉えており、さらに、「両親ともに冷淡と干渉」群の女性は社交不安障害傾向が高いことが示唆された。このことから、両親が養護的であるときょうだい関係は良好ではなかったと捉えられており、反対に冷淡で過保護な養育態度がきょうだい間の結びつきを強くしており、仮説2は支持された。

仮説3の検証 両親の養育態度及びきょうだいとの関係が社交不安障害傾向に及ぼす影響について検討する為に、PBI日本語版の4因子、きょうだい関係特徴調査の5因子を説明変数、LSAS日本語版の4因子を基準変数とする重回帰分析（ステップワイズ法）を行った。「両親ともに情愛と過保護」群について、女性にのみ有意なパスが示され「信頼」から「注目される状況への恐怖感/不安感」（ $Ra^2=.43$, $\beta=-.70$ ）、「対立」から「注目される状況の回避」（ $Ra^2=.48$, $\beta=.73$ ）であった。「両親ともに情愛と自律承認」群も女性にのみ有意なパスが示され、「父親CA」から「コミュニケーション状況への恐怖感/不安感」（ $Ra^2=.50$, $\beta=.73$ ）「注目される状況の回避」（ $Ra^2=.36$, $\beta=.63$ ）「親しくない他者との社交状況の回避」（ $Ra^2=.40$, $\beta=.66$ ）となった。「両親ともに冷淡と干渉」群は男女ともに有意なパスが示された。男性は「父親OP」「母親OP」「親密」「親和」からコミュニケーション状況への恐怖感/不安感」（ $Ra^2=.51$, $\beta=.28$, $\beta=.32$, $\beta=-.45$, $\beta=-.35$ ）、「親密」から「親しくない他者との社交状況の回避」（ $Ra^2=.24$, $\beta=-.51$ ）、「親和」から「注目される状況への恐怖感/不安感」（ $Ra^2=.23$, $\beta=-.51$ ）「注目される状況の回避」（ $Ra^2=.11$, $\beta=-.38$ ）であった。女性はわずかではあるが「親密」から「注目される状況への恐怖感/不安感」（ $Ra^2=.08$, $\beta=-.32$ ）「コミュニケーション状況への恐怖感/不安感」（ $Ra^2=.07$, $\beta=-.31$ ）「親しくない他者との社交状況の回避」（ $Ra^2=.11$, $\beta=-.36$ ）となった。これらの結果から、両親の養育態度が社交不安障害傾向に与える影響よりも、きょうだいとの関係が良好であるか否かが社交不安障害の傾向に影響を与えていることが示唆され、仮説3は一部支持された。

臨床心理学的意義

本研究から、社交不安障害傾向に影響を与えるものとして、母親だけでなく、父親の養育態度やきょうだいとの関係の重要性が明らかになった。特に少子化といわれる現代において、きょうだいの存在は重要であると考えられ、きょうだいとの関係の質がその後の社交不安障害傾向に影響を与える可能性があるという点が見いだされたことは意義のある事だったのでないかと考えられる。